

『どふぞ腫物だけ氣イ付けてや、頼むで。』

『解つてるがな。お前は向ふから廻り。』

『宜しか、もう宜えか。』

『阿呆やな。隠れん坊見たいに云ふてよる。チヤツチヤンチヤン……オイ早ふ當りんか。』

『もう宜えか。』

『そんな事云ふたら不可へん。……(ドーン)コラ氣イ付けやがれ。向ふ見さらせ。』

『向ふ見てたんや。そいたらお前がモウ宜え云ふ様な恰好したさかい突き當つたんや。』

『土阿呆。汝れの眼は銀紙か。もつと大きな眼を開いて歩き腐れ。何ちウ事をさらすね……(ボカツ)』

『アツ痛ツ。腫物丈けは叩いてなや云ふて頼んだアるのに。』

『何吐してケツかんね。洒落れた事云ふない。』ボカツくくくく。』

『痛いッ。痛いッ。痛いッ。コラ三つ撲く云ふ約束や無いかい。それに腫物の上ばつかり仰山撲きやがつてナ。……夫れ見い。此様血が出て來たわい。……汝れ糞つ垂れ奴。……』

『痛たゝゝゝ。オイく人の顔を引掴んでどふや。指が眼へ這入るがナ。コレ。眞劍に怒つたら不可んがナ。』

『何吐しやがんね。あない仰山撲かれて怒らん者が有るか。ウーム、糞ツ。』

『痛たゝゝゝ。よし眞劍に來るのやな。エイ。』ボカツ。ボカツ。どふやら喧嘩が眞劍物に成て來よつた。旦那方や御身分の有る御方は喧嘩の添杖を喰て、怪我でもしてはならんと云ふので

『嬢さん、此方へ早ふおいでやす。』

『旦那さん、お危なふムります。お逃げやす。』

『其處等は放つとき。怪我したらドムならん。サア皆早ふ逃げ。』

大騒ぎ。藝者帯間を連れた旦那衆や、金満家の嬢さん坊さん方は皆逃げて仕舞ひなはつて、掛茶屋はヒツソリして仕舞ひました。

『オイもう良えがナ。何時まで顔掴んでるね。』

『莫迦にしやがつて……』

『もう誰も居やへん。サア早ふ此酒肴を運ぶのや。』

『ホホー。美味相な物が有るな。鳥渡これ一切れ饗ばれるワ。』

『オイ喰ふのは後にしいナ。怒てるかと思ふたら物喰ふてよる。』

『まア先に酒を一杯……』

『運んでから飲みちウのに……オイ皆來い。お手操りや。』